

	<p>2016年 11月15日 第117号</p> <p>発行：いたばし水と緑の会事務局</p> <p>年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会 http://mizumidori2.eco.cocacn.jp E-mail : mizumidori@nifty.com 〒174-0063 板橋区前野町 5-31-7 瀬田方 tel&fax3969-7124</p>
---	--

バッタ広場と 草はらの生き物たち

これからの季節、赤塚城址の木々と真っ青な空の下で、野鳥の鳴き声と枯れ草と枯れ葉のカサカサという音のなかで、「バッタ広場の生き物たちはどうしているかな」と思いながら草原に浸っているととてもハッピーになります。

バッタ広場は、4月末から5月は草刈をしなかったこともあり、植物が大いに繁茂し、6月の植生調査ではクズに覆われてヤブになっていました。6月から9月まで暑期中、クズやアイビーを抜き、ササを刈りに奮闘しました。秋になるとあんなに汗だくになって草刈に格闘したことがうそのよう、葉が黄ばみ、スカスカになってほとんど枯れ野原になりました。

クズのジャングルにいた生き物

1 カナヘビ

生い茂ったクズの葉等にちょこんと乗っていました。

「ここにもいる」、「あ、またいた」と、夏の間は、本当にたくさんいました。カメラを近づけると茂みの中に逃げてしまうので、なかなか写真がとれません。カナヘビはヘビではなくトカゲの仲間です。



トカゲとカナヘビ（「生き物から見た東京の自然」より）

トカゲ（2012年から東日本から北海道に分布するトカゲをヒガシニホントカゲという）は茶褐色または暗褐色で、なめらかな鱗で覆われている。幼体は5本の黄色い線があり、尾は鮮やかなコバルトブルー。日当たりのよい草地や石垣などに好んで生息している。昆虫、クモ、ミミズなどの土壌生物を食べる。都市化で草地や、越冬・産卵する場所（石垣など）がなくなり個体数が減少した。

カナヘビ（ニホンカナヘビ）は、体はつやがなく、背面は褐色で、側面に白い線と暗褐色の線がある。日当たりのよい草地や藪に好んで生息し、昆虫類、クモ類を食べる。都市化で草地や藪がなくなったため個体数が減少した。

東京都版レッドリスト2010によると、トカゲは区部で絶滅危惧Ⅰ類、カナヘビは絶滅危惧Ⅱ類になっています。トカゲもカナヘビも「どこでも見られるありふれた生き物」と思い込んでいましたが、絶滅が危惧されている状況でした。確かに隙間のある石垣も、ヤブもなくなり、知らない間に彼らの住処を奪ってきたのですね。

2 ツチイナゴ

8月10日、8月28日に緑色のイナゴのような昆虫がいました。目の下に濃い緑色の「涙目」があつてツチイナゴの幼虫だとわかりました（写真下は8月27日撮影）。8月31日から土色になった成虫のツチイナゴが次々と見つかりました。ツチイナゴの活動期は他のバッタ類と異なり、秋から翌年の初夏まで、成虫で越冬します。クズなどの生い茂ったマント群落を中心とした草丈の高い草原に多く生息し、クズの葉が好物らしく、バッタ広場にたくさんいました。

マント群落とは：森林の縁に生えるツル植物などで、マントを着ているように森林を覆い、森林内の乾燥を防ぎ、土砂の流出を防ぐなど林内を守っている。



3 コミスジ

3本の白い筋が目立つチョウチョ。バッタ広場のクズのジャングルの上を飛んでいます。幼虫はクズなどのマメ科植物を食べるのですが、その色も形も全く目立たず、枯れ葉のカケラのような、「ごみ」のようなものなので、なかなか見つかりません。幼虫で越冬します。越冬中のコミスジもクズの葉についているのかしらん。夏から秋までクズを抜いているので、知らない間にコミスジの幼虫も死なせているのでしょうね。



4 クズの葉を食べるその他の虫



クズには他にもたくさんの虫がいました。写真は虫に食べられてボロボロになったクズの葉です。よくよく見ると中央に小さな虫が2匹重なっています。交尾中のコフキゾウムシです。小さくて目立たない虫たちが生活し、それを食べる虫たち、大きなカマキリやアブ、クモ、カナヘビなどの肉食の生き物たち、それに野鳥達と食物連鎖の世界が広がっています。

クズには、マメノメイガ（今年は多かった）、マルカメムシ、アオクサカメムシ、スズメガ（トビイロ

スズメ）、コフキゾウムシ、オジロアシナガゾウムシ（クズの茎に産卵し虫こぶをつくる）などマメ科の植物を食べる昆虫がいました。

9月11日、エコポリスセンターの蝶の調査会（指導：「板橋区の蝶を調査する会」）に参加された新井康之さんからいただいた報告では、「赤塚植物園や赤塚公園の梅林も巡りましたが、やはりバッタ広場では16種類といちばん多くの種類が見られました。」とのこと。私たちも数え上げるとそのくらいのチョウチョを見ていて、あらためて生き物の豊かな広場だと納得しました。

私たちがバッタ広場の草を刈らなかつたり、また刈ったりすることにより、そこにいる生き物たちの種類が変わっていきます。雑な刈り方ですが、生き物達に影響を与えています。機械による広範囲な草刈は、そこでくらす生き物にとって暴力的な自然破壊なのでしょうね。

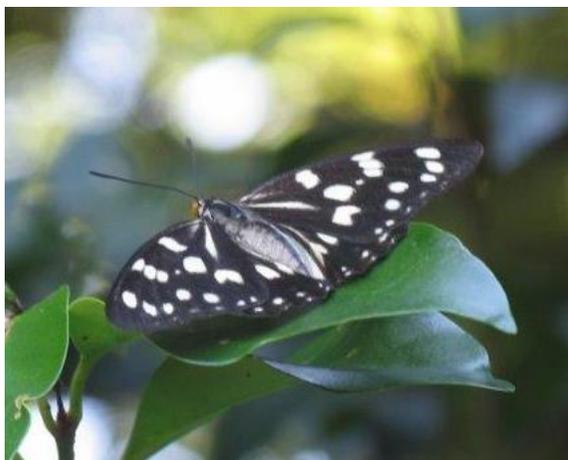


エノキの葉を食べるゴマダラチョウとアカボシゴマダラ

バッタ広場にはエノキの若い木がたくさんあります。城址の周りにはエノキの木が多く、野鳥が食べたエノキの実が糞と一緒にバッタ広場に落とされて芽生えたものです。私たちの目の高さにある若いエノキは、エノキを食草とするゴマダラチョウなどの昆虫たちを観察するのに具合がよく、卵→幼虫→サナギとゴマダラチョウの一生を観察できます。ゴマダラチョウは幼虫で越冬します。春夏はきれいな緑色ですが、秋は枯れ葉のような渋

い色で、糸を吐いて葉にくっついていたりします(写真上)。冬はエノキの幹の根元でエノキの枯れ葉の裏にくっついて越冬します。以前釣巻さんとエノキの高木の周囲の枯れ葉を一枚、一枚めくって越冬中のゴマダラチョウの幼虫を見つけたときは感動しました。春になるとエノキを識別して木を登り(飲まず食わず?で)、梢の若葉を食べてきれいな若葉色になります。城址では枯れ葉を掃除しません。ということは、幼虫が全滅しないで生き残れる環境です。

バッタ広場ではゴマダラチョウによく似ているアカボシゴマダラが増えています。



左：ゴマダラチョウ、右：アカボシゴマダラ（赤い斑紋がある）

今はゴマダラチョウよりもアカボシゴマダラの方が断然多いようです。どちらも成虫の羽は黒字に白の斑紋がありますが(アカボシは縞模様に見える)、夏に羽化するアカボシゴマダラには赤い斑紋がありません(春型は赤い斑紋がなく白っぽい)。またゴマダラチョウの幼虫は、上の写真のように、背中の突起は3対あり、お尻の先は別れています。アカボシゴマダラの幼虫は突起が4対で、お尻の先がくっついていて(終齢になると突起だけでは区別しづらいです)。

成虫も幼虫もサナギもよく似ているし、幼虫がエノキの葉を食べるのも同じ、越冬の仕方(枯れ葉に

くっついて地上で越冬する)も同じです。

アカボシゴマダラは中国大陸原産の外来生物です。「放蝶ゲリラ」により人為的に放されて関東を中心に蔓延し、関東全域から他県にも広がっており、環境省の「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」にも入っています。

私たちが見かけるようになったのは2000年に入ってからですが、十年ちょっとですっかりおなじみのチョウになってしまったのは恐ろしいくらいです。アカボシゴマダラが増えると生態系にどのような影響があるのかわかりません。餌となるエノキが不足するとは考えられませんが、アカボシゴマダラがウロウロしていると、ゴマダラチョウが引いてしまうのかしらとか想像したりしますが、そんな簡単なことではないかもしれません。赤い斑紋がきれいなので、幼虫を捕まえて飼育し、羽化したチョウを放して楽しむ人もいるようですが、生き物を捕まえたり、放したりすることは生態系に影響を与え感心しません。私たちは、自然の生き物に手を出さず、見守っていきたいと思います。(坂本 郁子)

トンボ池の水を抜いて 生物調査をします

今年は本当に雨が多かったですね。湧水が確実に入ってくるようになったトンボ池ですが、出口がないのが悩みの種。池底にはごついゴムシートが張ってあるので、水は溜まる一方です。5月には湧水の流入を減らし、人力でシート剥がし作業をしました。池底から水を浸透させるためです。これは重労働です。深い池ではザリガニが増えて困るのです。6月初めには浅くなった池にザリガニがいっぱいごめいていましたが、浅いとザリガニも身を隠せず、共食いしたり、野鳥の餌にもなったのでしょう、すぐに個体数は目に見えて減りました。が、6月中旬雨が降って満水になり、作業もできず中断。深い池に再びザリガニがうようよ。以来、流入湧水量を減らしたままでも、トンボ池は深い状態が続いています。写真右は7月8日撮影。5月に確認したオオアオイトトンボとイトトンボのヤゴ、産卵していたクロスジギンヤンマ、オオシオカラトンボ、ヤブヤンマはザリガニだらけの池で無事卵が孵ったのかしら。そしてヤゴたちは、水草の茂みに隠れて生き延びることができたのでしょうか。



今年もせっかく卵から無事孵ったオタマジャクシは全滅。ほとんどザリガニが食べたと思います。これでは、とてもビオトープと言えません。自然を守る活動をしている会としては、生態系に大きな影響を与えているザリガニの繁殖池を維持管理することはできません。

看板にいつわりあり？トンボ池は悩んでいる

深い池では維持管理作業もできません。そこで、11月には湧水の流入をストップして、再度池底を干します。天候は不順ですが、雨が少ない時期なので、うまくいけば水位が下がります。池の中の生物調査をし、動きの鈍くなったザリガニは駆除します（8頁の活動予定参照）。

次に池底のシートをもうもう一度徹底的に剥がします。枯れた水草を刈り、ザリガニが空けた穴を塞ぎ、土手を直し、それから湧水を入れます。カエルの産卵に間に合うといいですが、産卵してもカモやザリガニに食い尽くされるくらいなら、私には干上がったままの湿った草地として生き物の生息場所になるのもよいのではないかと思います。

トンボ池のこれからについては、悩ましいことばかり。やれるだけのことをやって、どうするかみんなで考えましょう。私たちの会も人手不足、体力不足です。池のあり方についてはいろいろなご意見があるとおもいます。ぜひお寄せ下さい（表紙のメールアドレス、FAX、電話など）。みなさまの応援もよろしくお願いいたします（坂本 郁子）。

成増の樹林地はどうなっているか

10月22日（土）成増駅集合で、成増の樹林地の観察会を実施しました。板橋区では平坦地や緩い斜面は開発されて自然は残っていませんが、残された北斜面や急傾斜地の樹林地のいくつかは板橋区が買収（寄贈されて）して区の公園緑地になっています。区の公園緑地になった樹林地のその後の様子や、とくに水と緑の会も関わった「成増1丁目向新田の森」の様子を見ることが観察会の目的です。下記の5地点が区の緑地になっています。

① 成増4-24前新田の森（閉鎖管理）→ ② 成増4丁目緑地（成増4-34）→ ③ 成増5丁目公園（成増5-11）→ ④ 成増5丁目子どもの遊び場（成増5-6）→ ⑤ 成増1丁目向新田の森（成増1-35）（閉鎖管理）。途中、白子川緑道と白子川沿いを歩きました。

⑤成増1丁目向新田の森は、白子川に面した北西向きの急な斜面と平坦地があり、フェンスで囲まれて閉鎖管理されています。急斜面も刈らずに緑地のまま保全され、大変ありがたいこととします。ここが区有地になるとき私たちもいろいろ要望し、マンション開発される区域から一部の植物を預かってここに移植しました。ゴズイ、ウグイスカグラ、ニガイチゴ、ツリガネニンジン、キンラン等々ですが、10年ほど前のこと、どこに何を移植したか記憶もおぼろげです。さて林内に入るとゴズイの木があり、実がぶら下がっていました。次頁写真上は、向新田の森

の林内です。区の緑地として整備されたとき、高木のシロダモや低木のアオキ等が伐採されて頭上が開け、下草も刈られました。今年見ると木の枝がさらに広がって、光があまり差し込まなくなり、木の種も育たず、アズマネザサも（昨年6月に適当に刈りましたが）刈る必要もないくらいです。でも10年前に種から芽生えたシラカシとムクノキは、成長に時間がかかりましたが2m以上に大きくなっていました。写真の右側に大きくなったシラカシ、中央に移植したゴンズイなどの低木の落葉樹が見えます。伐採すると林床に光が入って木の種などが芽生えますが、樹冠



が覆われて徐々に差し込む光が少なくなると生育が悪くなります。林床に光が入る伐採は、次世代の木が芽生えて育つ絶好の機会です。木が茂った林内の下草を刈っても何かが芽生えることはあまり期待できません。

フェンスの中の緑地は人が入って遊ぶことはできませんが、斜面も荒れずに安定しています。CO2を吸収し、すがすがしい空気を供給し、温暖化やヒートアイランドに対しても貢献しています。移植したけれど消えてしまった草花もあるでしょうが、安定した自然の森に育っていくといいですね。

写真下は同じようにフェンスに囲まれ閉鎖管理されている前新田の森です。公園整備時にすっきり？と伐採され、林床は何度も刈り込まれて裸地に。奥の木の根元の土砂も流出しています。

今回訪れた成増の森は、成増1丁目向新田の森を除いて、中途半端に維持管理されて、少々つまらない森でした。板橋区は崖線樹林地をもてあましているようです。



東京都建設局は土砂災害危険箇所マップを公表しています（建設局ホームページ）。これを見ると板橋区の崖線がほとんど土砂災害危険箇所になっています。崖線は板橋区の特徴です。そして少なくない崖線樹林地が公園緑地となっています。板橋区が祖先から預かり、子ども達の世代に引き継いでいく自然財産です。貴重な税金で取得した崖線緑地を使い捨ての子どもの遊び場所にしたり、「うっとうしい」等の理由で木を切り、下刈りをしてはげ山にしています。区の財産である崖線の自然はコンクリート擁壁になってしまうのでしょうか（坂本郁子）。

活動のお知らせ

運営委員会：11月26日（土）12：30～13：30

12月24日（土）12：30～13：30

作業・観察会の後に報告や活動内容などを相談します（ラーメンしらかば）。

連絡先；坂本（090-4618-1295）

●会報の発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：1月21日（土）12：30～

活動の問い合わせは事務局 瀬田（3969-7124）まで

活動予定いろいろ

1 赤塚ピオトープ（赤塚トンボ池、大仏下ミニトンボ池、バッタ広場）の環境整備と観察。

集合はいずれも赤塚トンボ池前（板橋区立美術館そば）

バッタ広場では冬の手入れをします。ササを刈り、木を切り詰めるなど。トンボ池では、11月19日に湧水の流入を止めます。干上がった池で生物調査をし、ザリガニを捕獲します。フェンス際の枯れ草、枯れた水草を刈ったり、ゴムシートを剥がして水抜けを促進させ（水漏れ防止の逆のこと）、湧水が棚田1から順に落ちるように土手のザリガニ穴を直したりします。池の水のたまり具合を見て、トンボ池かバッタ広場かになります。

11月26日（土）10：00～11：30 トンボ池生物調査、

12月17日（土）10：00～11：30 未定

12月24日（土）10：00～11：00 未定

1月21日（土）10：00～11：00 未定

2 日暮台公園樹林地の観察プラスα

（樹林地内の推移と林縁植物を観察、様子を見て林縁の草取りを少々）

12月3日（土）、1月7日（土）いずれも10：00～11：30

日暮台公園前集合

●いたばし水と緑の会のURLが変わりました。

<http://mizumidori2.eco.coocan.jp>

●ピオトープ管理のボランティア大歓迎

当会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、生き物のすめる水辺（赤塚トンボ池）や草地（赤塚公園バッタ広場）などの管理作業、自然樹林地の定点調査などを行っています。●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）お送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。